

## 小説の舞台としての隋唐洛陽城

橘 英 範

### はじめに

事実の記録に過ぎなかった六朝までの志人・志怪小説に代わり、唐代に入ってフィクション性を持った伝奇小説が誕生したのは周知の事実であるが、その唐代小説の舞台として最も重要な場所が、都長安であることは言を俟たない。

「任氏傳」「李娃傳」「霍小玉傳」「杜子春傳」など、唐代伝記の代表的名作の多くが長安を舞台として語られており、金文京氏も「李娃傳」の詳細な解説において、この小説の隠れた主人公が長安の町そのものであることを指摘しておられる<sup>(1)</sup>。

その長安に次いで小説の舞台として重要な都市が、東都洛陽であろう。

小説の舞台としての洛陽に関する先行文献としては、葛永海氏の研究があり<sup>(2)</sup>、氏は、洛陽に寺観が多く宗教的な色彩を持つこと、それにより怪異に関する話が多いこと等の指摘を行っている。葛氏の指摘される通り、洛陽を舞台とした唐代の小説には怪異に関する話が多いようだが、それは寺観が多く宗教的色彩を帯びているためだけであろうか。確かに中国最初の寺といわれる白馬寺があり、仏教を厚く保護した北魏の洛陽城を懐古する『洛陽伽藍記』が著わされるなど、漢魏洛陽城は宗教的色彩が強く、別の場所に移されたとはいえ、隋唐洛陽城も、実際上でもイメージ上でもそれを受け継いでいると思われるが、人々が多く集まる都市には寺観は自然と多くなるものであろう。例えば都長安にも多くの寺観があったと思われるが、特に怪異に関する話が多いとはいえないのではないか。また、隋唐洛陽城を舞台とした怪異小説を見ると、寺観はそれほど多く登場していないようにも思われる。ほかにもっと重要な、他の都市にはなく洛陽のみが持つ小説の舞台としての特色があるのではないだろうか。

以上のような視点から、本稿においては、『太平廣記』に収められた話を中心として、葛氏と異なる角度から、小説の舞台としての洛陽の特色について考えてみたいと思う。

## 一、洛水

小説の舞台としての隋唐洛陽城を考える時、その最大の特色は、町を南北に分断して洛水が流れていることではないだろうか。

周知のように、漢魏洛陽城は、その名の通り洛水の陽に築かれたが、隋唐洛陽城はその約10キロ西、現在の洛陽市の位置に、洛水を挟む形で築かれた<sup>(3)</sup>。これは天に象って洛水を天の川に見立てたものとされるが、唐長安城にも漢魏洛陽城にもあるいは南朝の建康城にも見られない、特殊な形式であった<sup>(4)</sup>。

このことは、隋唐洛陽城の地図を一見すればすぐに分かることであり、ごく初歩的な常識になっていることなので、取り立ててこの点を強調するのは奇異に感じられるかもしれないが、実際にそこに住んでいた当時の人々にとっては、かなり大きな意味を持つものではなかったかと思われるのである。

つまり、隋唐洛陽城に住む人々は、洛水の北側から南側、あるいは逆に行こうとするだけで、洛水を渡る必要があるのである。例えば、隋唐洛陽城では、洛水の南側に官僚の家が多かったとされるが<sup>(5)</sup>、官僚の勤務場所たる皇城は、洛水の北側にあった。つまり洛水の南側に住んだ官僚は、出勤するのに、毎日行きと帰りに洛水を渡らなければならない。洛陽にほとんど皇帝が行幸せず、官僚の隠棲場所の趣を持った中唐期以降は別としても<sup>(6)</sup>、安史の乱以前、特に高宗～武后期には、洛陽が中心的役割を果たしていた。その頃の官僚のうち南側に住む者たちは、みな出勤・帰宅の際に洛水を渡っていたのである。

本稿が対象とする『太平廣記』中の小説からも、そのことがうかがえる。

### 1 『太平廣記』巻201「上官儀」(出『國史異纂』)<sup>(7)</sup>

高宗の御代は貞観の治世の後を承け、天下太平であった。その頃、上官儀が一人で国政を取り仕切っていたが、彼は、いつも明け方早くに朝廷に参内するのに、洛水の堤をめぐるながら、残月の中、手綱をゆるめて(常凌晨入朝、巡洛水堤、歩月徐轡)、詩を朗詠するのであった。

上官儀の出勤の様子を伝えた話である。彼の洛陽での邸宅がどこにあったのかは明らかでないが、恐らく洛水の南にあったために、洛水の堤を通して出勤したのであろう。

2 『太平廣記』卷494「崔湜」（出『翰林盛事』）

崔湜が執政となった時、年は27、容姿が優れ、文辞にも秀でていた。ある時、夕暮れに端門を出て、天津橋を下りながら、馬上で詩を吟じた（嘗暮出端門、下天津橋、馬上自吟）。

崔湜の帰宅の様子を伝える資料である。『唐兩京城坊考』によれば、崔湜の家は南側の道化坊（付図H 9）にあった。そのため、帰宅するのに、皇城の南門である端門を出て、天津橋を渡ったのである。

中唐期以降は長安が政治の中心となったので、洛陽に住んで、皇城への出勤の往復に洛水を渡らなければならない官僚は少なくなったと思われるが、洛陽に置かれた河南府に勤務する官僚はいたはずである。例えば、元和2年（807）、河南尹鄭餘慶の賓佐として洛陽に招かれた孟郊は、洛水の北の立德坊（H 4）に新居を構えた<sup>(8)</sup>。河南府の役所は南側の宜範坊（G 9）にあったから、孟郊はいつも洛水を渡って出勤していたはずである。

また、河南府に勤めていなくても、友人が洛水の対岸に住んでいれば、会いに行くには洛水を渡らなければならない。例えば晩年洛陽南側の履道坊（L 12）に居を構えた白居易の場合、知人のほとんどは同じ南側に住んでいたようだが、北岸にも知人がいたことは、會昌元年（841）の「題崔少尹上林坊新居」3492の作からうかがえる<sup>(9)</sup>。詩題にいう崔少尹が誰かは不明であり、この人物に関する詩はこの一首のみが残っているだけのようなので、恐らく頻繁に行き来したわけではなかろうが、それでもこの詩を作った時、70歳の白居易が友人の新居を見るために、わざわざ洛水を渡って北側の上林坊（L 5）まで訪ねていったのは確かであろう。

以上のように、洛水が洛陽の町を分断して流れていたことは、洛陽に暮らす人々の日常生活に大きく影響しており、小説の中にも当然洛水が登場するのだが、小説の舞台として考えた場合、このことは重要な意味を持つと思われる。

それは、よく知られるように、川および水辺というものは、異界・境界としての性格を持っているからである<sup>(10)</sup>。

とりわけ洛水は、河図洛書の昔から、異界としての性格が強かった川であり、その最も著名な例が、曹植「洛神賦」（『文選』卷19）に描かれる洛水の神女の話であろう。その伝統は、魏の明帝が洛水の白いカワウソを捕らえる話（『太平廣記』卷201「徐邈」、出『齊諧記』。なお卷466「徐景山」は出典を『續齊諧記』とする）、洛子淵という洛水の神様が登場する話（『太平廣記』卷292「洛子淵」、出『洛陽伽藍記』）、晋の永嘉

の乱の時、洛陽で出仕して乱のために帰れなくなった息子のために故郷の父が山の神に祈ったところ、少年と化した神が洛水から出てきて故郷に連れ帰る話（『太平廣記』巻294「湛滿」、出『十道記』）など、六朝を舞台とした小説にも受け継がれている<sup>(11)</sup>。隋唐洛陽城は、その洛水を間に挟む形で造られているのである。

このような洛水の異界性を示す話は、唐の時代に入っても受け継がれている。

### 3 『太平廣記』巻467「洛水豎子」（出『朝野僉載』）

ある人が、子供が洛水で馬を洗っているのを見ていると（有人洛水中見豎子洗馬）、突然、川の中から白い絹のようなものが出てきて、少年の首に巻き付いた。少年はそのまま川の中に落ちて死んだ。この化け物はどこの川や水辺にもいるもので、白特という蛟の一種である。

洛水から突然現れた怪物に子供が殺される話である。この話では、白特という化け物がどこにでもいるとってはいるが、やはり洛水の異界性が感じられる話といえるのではないだろうか。

### 4 『太平廣記』巻434「洛水牛」（出『廣異記』）

咸通四年（863）秋、洛陽に洪水があった。香山寺の僧侶が後に語ったところによると、その日、雨で増水した竜門の川が北（すなわち洛陽の方向）へと流れ（見暴雨水自龍門川北下）、その中から二頭の黒い牛が現れ、躍り上がって進んでいったが、洛陽城の定鼎門と長夏門が開き、城中から二頭の青い牛が躍り出て（俄見定鼎長夏二門陰暘開、有二青牛奮勇而出）、それを迎え撃ち、黒い牛が引き返して、洪水はおさまったという。

この話では、竜門の川すなわち伊水が氾濫し、そこから現れた黒い牛が洛陽に押し寄せようとしているのを、洛陽城から出てきた二頭の青い牛が防いだということになっている。『太平廣記』でこの話に「洛水牛」の題名が付けられているように、この青い牛は洛水の神の化身であり、伊水の神である黒牛より神格が高いので撃退できたということであろう。

このほかに、崔玄亮が洛陽で川辺を散歩している時、鶏の卵のような石を見つけ、もてあそびながら歩いていると、急に石が割れて鳥が飛び立った話（『太平廣記』巻398「卵石」、出『西陽雜俎』）なども、洛水とはっきり書かれている訳ではないが、洛水の可能性があろう。

以上のように、洛水は古くから非常に異界性の強い川であり、その伝統は唐代まで続いていた。隋唐洛陽城では、その川が町の真ん中を貫いて流れていたのである。

## 二、天津橋と中橋

隋唐洛陽城について考える場合、洛水の異界性ととも重要になるのは、そこに架けられた橋であろう。漢魏洛陽城も同じ洛水が町の南を流れていた。また、唐長安城の北には渭水があり、杜甫の「兵車行」（『全唐詩』巻216）の舞台としても名高い渭橋もあった。しかし、これらの川を渡るのは、城内から出る時、つまり特別な時のみであったろう。これに対し隋唐洛陽城では、洛水が町の中を通っていたために、先にも触れたように、人々は橋を日常的に渡らなければならなかった。そして、橋というものは、異界である川の上に架かって此岸と彼岸を結ぶ、境界の意味を持っていたのである<sup>(12)</sup>。本節では、隋唐洛陽城に架かっていた橋について述べてみたい。

隋唐洛陽城においては、洛水の三箇所にも橋が架けられていたという。

小説に最もよく登場するのが、すでに2の話にも見えた天津橋で、皇城の正南門である端門の南、メインストリートの定鼎門街上にあった。もともとこの部分は、二つの中洲により三つに分かれた洛水の流れに、北から黄道橋・天津橋・星津橋（皇津橋・重津橋とも）の三つの橋が架かっていたが、南側の中洲と洛水南岸が地続きとなったため、開元20年（732）に、天津橋と星津橋を一つにして新たな天津橋が架けられた。この新しい天津橋が全長500メートルを超える朱塗りのアーチ型の橋であったこと、そしてそこが往来の激しいにぎやかな場所であり、皇帝が洛陽を訪れると百官が出迎える場所であったこと、さらに唐詩にも多く詠じられていることなど、松浦氏・植木氏の書に詳しく述べられている<sup>(13)</sup>。

天津橋がにぎやかな場所であったということは、両氏の書のほかに、後に挙げる小説の例からも明らかだが、相田氏の研究によってさらに例を補っておけば<sup>(14)</sup>、神龍元年（705）、則天武後の死の直前、宰相張柬之らが兵を起こして張易之・張昌宗らを斬り、その首を「天津橋南」でさらしておき（『舊唐書』張行成傳に付された張易之・張昌宗傳および桓彥範傳）、開元21年（733）、契丹の首領である屈刺・可突干の首をさらしたのもやはり「天津橋之南」であった（『舊唐書』張守珪傳）。人のいない場所でさらし首を行っても意味がないから、これらの例も、天津橋が人通りが多い繁華な場所であることを示していよう。

このことは、小説の舞台としての天津橋に、さらに重要な意味をもたらすものとい

えよう。人が多く集まり行き交う場所であるということは、境界性を持つ場所としてもう一つの重要な場所である市と似た性格を持つことになるからである<sup>(15)</sup>。つまり天津橋は、橋と市という二重の境界性を持つ場所なのである。

小説中にも、そのことをうかがわせる例がある。

5 『太平廣記』 卷77「錢知微」(出『酉陽雜俎』)

唐の天宝の末、錢知微という術士が洛陽に至り、天津橋に住んで易者を始めたが(居天津橋賣卜)、その占いはよく当たった。

6 『太平廣記』 卷209「東都乞兒」(出『酉陽雜俎』)

大暦年間、洛陽の天津橋に乞食がいた(東都天津橋有乞兒)。両手がなく、右足に筆をはさみ、それを一尺あまり放り上げてから足で受け取り、美しい楷書で写経をして錢を乞うた。

ともに『酉陽雜俎』に記される例で、松浦・植木両氏の書でも触れられている話である。

前者は『酉陽雜俎』の方では天津橋に広告を出した(「榜天津橋表柱」ということになっているが、店を構えるにせよ広告を出すにせよ、人通りの多い繁華な場所であることを表していよう。そして、それがよく当たる易者という神秘的な人物であることは、天津橋の持つ境界性と関連すると思われる。

後者は身体に障害のある乞食が天津橋で芸を見せる話である。現実的に考えれば、身体に障害がある人物がそれを補うための特別な能力を身につけるのは実際に見られることであり、また、その能力やあるいは障害そのものを見せ物にすることによって生活の糧を得るのも、ごく一般的なことであつたらう。それを天津橋で行ったのは、人通りの多い場所だったからというのが事実なのかもしれないが、それを見聞きし、記録した人々にとっては別の意味も持っていよう。よく知られるように、乞食とは賤民でありながら同時に聖性を持つ異人にほかならず<sup>(16)</sup>、その異人が天津橋で特異な能力を見せるのは、人々にとって非常に神秘的なことであつたに違いない。橋が持つ境界性を示す例として差し支えないだろう。

次に中橋について述べよう。その名の通り、三箇所に架けられた橋のうち、中央にあつたのが中橋である。この橋は架けられた場所が変わっており、隋の大業初年に洛陽城が完成した時には恵訓坊(G6)の北に架けられていたが(旧中橋)、唐の上元

2年（675）に安衆坊（I 6）の北に移された（新中橋）。かなり早い時期に架け替えられており、小説に登場する中橋は、新中橋がほとんどと考えてよいだろう。以下に挙げる例でも、年号が記されたものや登場人物等により年代が推定できるものは、全て新中橋を指している。

この移設は、長夏門街の延長線上に架けることによって往來の便を図ったためとされるが<sup>(17)</sup>、その目的は十分に達せられたようで、次に引く7の資料に見えるように、易者が店を構えたり、後に引く17の資料に見えるように、人捜しの懸賞金が置かれたりしている。ともに人通りのない寂しい場所では意味がなかろう。そう考えると、中橋も天津橋と同じように、橋と市という二重の境界性を持つ場所だったといえよう。

ほかに、則天武後の垂拱4年（688）、瑞石「宝図（天授聖図）」が洛水から出たとされ（実は唐同泰が偽造したものという）、武后が祭壇を築いて皇太子や内外の文武百官、異民族の長を迎え、「洛水之北、中橋之左」において、大々的に洛水を拝し図を受ける儀式を行った例（『舊唐書』禮儀志四）や、相田氏も引く<sup>(18)</sup>、天宝15載（756）、安祿山軍に捕らえられて洛陽に移送された顔杲卿が、祿山を面罵したために「中橋南頭從西第二柱」に縛り付けられて処刑された例（『舊唐書』忠義傳下）からも、中橋が市としての性質を持っていたことがうかがえよう。

ここで小説の中から、そのことを示す例を一例挙げておこう。

#### 7 『太平廣記』卷77「胡蘆生」（出『原化記』）

後に宰相となる李蕃（李藩）は、かつて洛陽に寄寓していた。30近くになったのに官位もなく、妻の崔氏の家にやっかいになっていた。当時中橋に胡蘆生という者がおり（時胡蘆生在中橋）、李蕃は足に瘡を患っていて、家族を連れて揚州に移ろうかどうか悩んでいたもので、胡蘆生のもとを訪ねた。胡蘆生は李蕃が訪ねてくるのをあらかじめ知っていたばかりでなく、謎のことばを口にする。後になって、そのことばが宰相になることを暗示していたことが分かるのだった。

先に引いた5の例のように、中橋に店を構えていた易者が神秘的な予知能力を示すという話で、李蕃は元和期に活躍した人物である。同じ話は『太平廣記』卷153「李蕃」（出『逸史』）・卷155「李固言」（出『補錄記傳』）にも見え、後者には住む場所を記さないが、前者には「時中橋胡蘆生者善卜」という記述がある。やはり単に往來が激しく店を出すのに適していたというばかりでなく、中橋の持つ境界性というものが重要なのであろう。

また、この胡蘆生（胡蘆生とも）という人物は有名な人物だったようで、後に引く

13の話でも活躍するが、そのほかに『太平廣記』巻460「裴沆」（出『西陽雜俎』）にも登場する。旅の途中、病気の鶴を見かけた人物のところに、突然白衣の老人が現れ、鶴を助けるためには三世の間人間だった人物の血液が必要であり、胡蘆生の血がふさわしいといわれ、洛陽に赴いて胡蘆生から血をもらおうという話である。中橋という記述はないが、胡蘆生の異人性がよく現れているといえよう。中橋は、このような人物が住むのにふさわしい場所と考えられていたのである。

このほか、どの橋かは定かでないが、次のような話もある。

#### 8『太平廣記』巻217「鄒生」（出『雲溪友議』）

武宗の時（武宗は840～846在位）、宰相の李回が何度受けても科挙に合格できなかった頃、洛橋に出かけたことがあった（累擧未捷、嘗之洛橋）。そこには二人の術士がおり、一人は筮竹占い、一人は亀トを得意としていた。李回が両者に占ってもらったところ、鄒生の亀トの方がよく当たった。

この話では単に「洛橋」というのみで、次に触れる浮橋である可能性や、洛水以外の水路に架かった橋である可能性も否定できないが、やはり境界性を強く有していた天津橋か中橋に関する話と考えるべきであろう。孟郊に「洛橋晩望」（『全唐詩』巻376）の詩があり、詩中には「天津橋下冰初結」の句があることからすると、天津橋を指すのかもしれないが、一応慎重を期して不明としておいた。占い師が二軒も営業しているということは、これまでの話同様、人通りの多い場所であったことを表すとともに、やはり神秘的な場所であったことも示していよう。

最後に、第三の橋について触れておこう。

三箇所の橋のうち、一番西にあったのが浮橋で、慈恵坊（J 6）の北、南市（J 8 9）の北牆東偏門の北方に当たる場所にあった。乾封（666～668）中に壊れたが、後に私設されたもので、これはその名の通り舟を連ねた浮き橋だったという<sup>(19)</sup>。管見の及んだ限りでは、この橋は小説の重要な舞台とはなっていないようだ。南市の北とはいえ、浮き橋であるとしたら車馬の通行には不便と思われ、先に見た二橋のように繁華な場所ではなかったためであろうか。あるいは浮き橋であるとしたら、橋桁の下の空間がなく、「彼岸にも此岸にも帰属しない宙吊りの別世界—傍点橋」<sup>(20)</sup>という条件を満たしていないからかもしれない<sup>(21)</sup>。

### 三、洛陽を舞台とした小説

以上のように、隋唐洛陽城は、その中心に異界である洛水が流れ、そこに境界である天津橋・中橋が架かっていて、人々はその町で日常生活を送っていたことになる。そのため、洛陽ならではのと思われるような小説が多く生み出されているのである。以下、舞台が洛陽でなければ生まれえなかったと思われるような小説の例を見ていきたいと思う。

まず、洛水の異界性をよく表している話を見てみよう。先に挙げた3・4の話のほかにも、次のような話がある。

#### 9 『太平廣記』 卷331 「洛陽鬼兵」（出『紀聞』）

貞元23年（貞元は21年までであり、開元の誤りとされる。開元23年であれば735）夏六月、皇帝が洛陽にいたところ、鬼兵が暴れ回り、民衆は驚いて、逃げ出すのであった。この鬼兵たちが洛水の南を過ぎると、町は騒々しくなり、それがだんだんと洛水の北へ移っていく（其鬼兵初過於洛水之南、坊市喧喧、漸至水北）。まるで武装した数千万の兵士達が空中で騒々しい音をたてているようなありさまで、これが毎晩であった。帝はこれを嫌って巫祝にお祓いをさせ、毎晩洛水のほとりに飲食を供えた（毎夜於洛水濱設飲食）。

洛水の南から北へと暴れ回る鬼兵の話である。この鬼兵がどこから来たのかははっきりとは書かれていないが、洛水のほとりに供え物をさせたことからして、洛水と関連があると考えられていたのであろうし、また、洛水の南から洛水の北に移動するところにも洛水の異界性がうかがえよう。おびただしい数の異類が、都市全体を縦横に暴れ回るといふわけだが、このような話は、洛水が都市の中央部を貫流する隋唐洛陽城以外では、生まれえないものだったのではないだろうか。

次に、天津橋にまつわる話を見てみよう。先に挙げた5・6の話以外にも、次のような話が残されている。

#### 10 『太平廣記』 卷126 「萬國俊」（「出處缺」と記される）

唐の侍御史萬國俊は残忍な性格で、六道の使に上奏して流民を大量に処刑した。ある日御史台を出て、天津橋の南に至った時（從臺出、至天津橋南）、道いっぱい鬼が現れ、馬の足を切って進めなくさせた。萬國俊は土下座するから許してくれと何度も叫んだが、舌の長さは数尺になり、全身は青く腫れた。家にたどり着いた

が、夜中には死んだ。

萬國俊は武后期の有名な酷吏。それが突然現れた亡霊たちに囲まれて、ついには死に至るという話である。この話では「天津橋南」となっており、厳密には橋の上ではないが、先に見たように、天津橋の南側は市としての側面を持っていた。やはり境界性に関わる例といえよう。時期は洛陽を都とした武后期に設定されており、先に述べた通り、洛陽城の南側に住む官吏は天津橋を渡って皇城に通っていた。萬國俊はその帰宅の途中で異類に襲われたのである。

11『太平廣記』卷138「裴度」(出『劇談録』)

裴度がまだ微賤だった頃、洛陽に寓居し、いつも足の悪い驢馬に乗って皇城に通っていた。ある時、天津橋を渡っていると(方上天津橋)、ちょうど淮西の乱が何年も続いていた時期で、二人の老人が橋柱にもたれて、「反乱はいつになったら平定されることやら」と話していた。その老人たちは裴度を見ると驚いて道をあけた。一人の下僕がやや遅れて歩いており、老人たちが「あの人が將軍になるまで平定されまい」と話しているのを聞いた。下僕が裴度にその話をする、裴度は笑って信じなかったが、その年の秋に郷薦となったのを皮切りに、とんとん拍子に出世して、ついには淮西節度使となり、淮西を平定した。

有名な宰相裴度が、天津橋で出逢った二老人に未来を予言される話である。この不思議な二人の老人に出逢うのが、やはり出勤途上の天津橋であり、洛陽ならでの出逢いの場所といえるだろう。

同じような話はもう一つある。

12『太平廣記』卷393「又」<sup>(22)</sup>(出『錄異記』)

ある儒生が天津橋で二人の老人が話しているのに出逢ったところ(洛京天津橋、有儒生、逢二老人言話)、彼らは翌日の昼に寺で行う腕比べの話をしていた。一人が「私の一声で、人々の乗ってきた驢馬がみんな集まる」といえば、もう一人は「私の一声で、十丈の旗竿がみんな計算用の木ぎれになり、しかも十本ずつまとまる」という。儒生がその時刻に寺に出かけてみると、雷雨が起こり雷がとどろいて、老人たちのいった通りになった。

これも不思議な二老人に天津橋の上で出逢う話で、二老人の正体はどうやら雷神だ

ったようである。この儒生の場合は出勤途上かどうか分からないが、天津橋は、このような異界の人間がいても不思議でない場所だったのである。

次に中橋を舞台にした話を見てみよう。先に挙げた7の話のほかに、このような話もある。

13『太平廣記』卷118「韋丹」（出『河東記』）

韋丹がまだ科挙に合格する前、驢馬に乗って洛陽の中橋を通りかかると、漁師が数尺もある亀を捕まえて、橋の上に置いているのに出くわした（嘗乗蹇驢、至洛陽中橋、見漁者得一龜、長數尺、置于橋上）。韋丹は亀をかわいそうに思い、自分の乗っていた驢馬と交換して逃がしてやる。その数日後、韋丹が胡蘆先生という易者に運勢を占ってもらいに行くと、胡蘆先生は元長史という人物が韋丹と会いたがっていると述べて、通利坊の元長史の家連れて行った。長史は元濬之と名乗り、恩返しをしたいと言うので、韋丹は元長史が亀であることを悟る。元長史は韋丹の一生を記した文書と大金を韋丹に贈った。後に通利坊を訪ねても元長史の家を見つけることはできなかった。その後、韋丹はもらった文書に書いてある通りの生涯を送った。

元和期に活躍した韋丹が、若い頃に中橋で亀を助け、恩返しされる話である。ここには、7の話の部分で触れた胡蘆生が登場している。中橋は、7では胡蘆生の住んでいる場所だったが、ここでは亀を助ける場所となっている。正体が亀である元長史の家は通利坊（J 7）にあるが、この坊は南市のすぐ北、洛水から南へ二つ目の坊であり、最も近いのは浮橋だが、中橋からもそう遠くない。洛陽に洛水が流れ、中橋という橋が架かっていたからこそ生まれた話といえるだろう。

14『太平廣記』卷338「道德里書生」（出『紀聞』）

洛陽道德里に住むある書生が、日暮れに中橋に通りがかった時、貴人が家来を従えているのに会う（唐東都道德里有一書生。日晩行至中橋、遇貴人部從）。書生を見て声をかけ、後に従うよう言った。20歳あまりの美しい女主人が絶えず書生に話しかけ、そのまま長夏門を出て竜門に至った。そこにあった屋敷に入り、美しい部屋でご馳走され、一緒に寝たが、夜中に目が覚めると、そこは石窟の中で、婦人の死体があつた。危険な岩を伝って明け方に香山寺に至り、僧侶に家まで送ってもらったが、数日後に亡くなった。

これは、中橋で美女の幽霊に出逢う話で、中橋の境界性が非常によく分かるという点も重要だが、その後の書生の行動も非常に興味深い。

書生の家がある道德坊（H6）は中橋のすぐ南であり、中橋から真っ直ぐ南に下ったところに長夏門がある。時間設定が夕方であることからすると、書生は日が暮れたので家に帰ろうとして中橋を渡っていたと思われる。ところが中橋で出逢った女性の美しさと話し上手に引き込まれ、ついつい家のある道德坊の前を通り過ごし、そのまま長夏門から出て、南の竜門へと向かうのである。美女の屋敷と思ったのは、実は竜門の一石窟であり、そこを命からがら逃げ出して、香山寺の僧侶に助けられる。

隋唐洛陽城内外の色々な場所が舞台となって、この話のストーリー展開を支えている。まさに洛陽という都市が生んだ話ということができよう。

次に、天津橋と中橋の二つがともに登場する話を見よう。

#### 15『太平廣記』卷35「王四郎」（出『集異記』）

洛陽県尉であった王琚には妾の産んだ甥がおり、小名を四郎といった。まだ小さい頃、母が他家に嫁いで行くのについて行き、その後5年か10年に一度王琚の家を訪れたが、王氏一族は家族と認めていなかった。元和年間、王琚が転勤で鄭州から長安に行く途中で洛陽を通り、天津橋を過ぎようとしていたところ、四郎が突然馬前に現れて挨拶した（自鄭入京、道出東都、方過天津橋、四郎忽於馬前跪拜）。布衣を着て草履をはき、山野に住む人のようだった。四郎は叔父の旅は費用がかさむからと王琚に金を与えた。四郎はこれまで王屋山下の洞窟におり、これから峨眉山に向かうところで、洛陽では中橋の席氏の旅館に泊まっているという（對曰、中橋逆旅席氏之家）。ちょうど小雨が降り出し、王琚は雨衣を持っていなかったので、着替えてから四郎の宿に行きたいといったが、旅程の関係で待つことができないという。王琚が着替えて四郎の宿に行ってみると、果たして出発した後だった。宿の主人の席氏に聞いてみると、四郎はとても美しい妻妾を4、5人連れており、衣服も鞍馬も豪華で、劍南に行くといって出発したという。後に王琚が長安で金を売ると大金を手に入れることができた。四郎には二度と会うことができなかった。

この話では、仙人となった甥に出逢うのが天津橋であり、さらにこの甥は中橋の宿に宿泊している。天津橋が異類と人間が交錯する場所とされているのは明らかだが、中橋の方も、単ににぎやかなために宿屋が営まれている場所というばかりでなく、多

くの宿に荷を解いたたくさんの宿泊客の中に、異類の一人や二人がいてもおかしくないような場所として登場しているのであろう<sup>(23)</sup>。

橋は限定されないが、次のような話もある。

16『太平廣記』巻298「太學鄭生」（出『異聞集』）

則天武后の垂拱年間（685～688）、太学進士の鄭生という男が、朝に銅駝坊を出て、残月を愛でながら洛水の橋を渡っていると、橋の下から悲しげな泣き声が聞こえてきた（太學進士鄭生晨發銅駝里、乘曉月、度洛橋、下有哭聲甚哀）。そこで馬を下りてみると、一人の美しい女がおり、兄嫁にいじめられたことを苦にして、身を投げようとしているという。そこで鄭生はこの女を家に連れ帰り、汜人と名付けた。汜人には文才があり、誰も唱和できないような詩を作った。鄭生が貧乏だったので、ある時汜人は自分の絹一反を鄭生に与えたが、それを売ってみると胡人が大金で買っていった。数年後、鄭生が長安に出ようとする、汜人は自分が湘水の竜王の妹であると明かし、年限が満ちたので帰らなければならぬと述べて去っていった。

沈亞之の文集に「湘中怨辭」として載せられる話である。洛陽の橋の下で出逢った女性と結婚したら、正体が竜王の娘であったという異類婚姻譚となっている。ここでは「洛橋」とのみ書かれていて橋を特定できず、銅駝坊（JK5）は浮橋のすぐ北の坊なのだが、先に8の部分で述べたように、ひとまず天津橋か中橋のどちらかのことと考えておきたい<sup>(24)</sup>。

ここでは橋の上ではなく橋の下となっており、川に近いという点では、橋の上よりもさらに異界に近づいた場所といえよう。鄭生が朝早く家を出たのが、太学に行くためなのかあるいはほかに目的があったのかははっきりとは書かれていないが、「乘曉月」という書きぶりからすると、どこかへ急いでいたようではなく、朝の散歩か何かのようである。遠く城外に出るまでもなく、朝のそぞろ歩きの途中でも異界への扉が開いているのが、洛陽という町なのである。

以上、川と橋があることによって、怪異が起こる場所に設定された例を中心に見てきたが、これらの場所はもちろん神怪小説の中でのみ現れるのではない。最後に、怪異と関わらない例の一つ挙げておこう。

17『太平廣記』卷494「崔思兢」(出『大唐新話』)

則天武後の頃、崔思兢のいとこの崔宣が謀反を企んでいると密告したものがあり、御史台の張行岌が取り調べに当たった。密告者はあらかじめ宣の家の妾を誘拐して監禁しておいて、妾が謀反の計画を暴こうとしたため、宣が妾を殺し、その死体を洛水に遺棄したのだと称した(而云、妾將發其謀、宣乃殺之、投尸于洛水)。行岌は取り調べたが、何も証拠が出ない。武後は怒って再調査を命じたが、結果は同様であった。武後はさらに無罪を証明したいなら必ず妾を探し出すように強く命じた。行岌は恐れて、妾を探そう宣の家に迫った。思兢はそこで中橋の南北にたくさんの懸賞金を置き、妾を監禁しているものを探したが(思兢乃于中橋南北、多置錢帛、募匿妾者)、数日たっても何も情報は得られないままだった。今回の件に関して崔家で密談することが密告者に知られていることに気付いた思兢は、家の中に協力者がいると考え、殺し屋を雇って密告者を殺すといういつわりの計画を相談し、朝早く御史台の前で身を潜めていた。崔の家に舒という客人がおり、言行が立派で、兄弟同様に信頼していたが、なんとこの舒がやって来て、御史台の門番に賄賂を贈って密告者に報告させ、密告者が命を狙われていると言い出したので、御史台は大騒ぎになった。思兢は舒をこっそり尾行した。天津橋に至り、御史台に戻れなくなったのを見計らって、舒を大いに罵った(密隨之、到天津橋、料其無由至臺、乃罵之)。舒は謝罪し、思兢を密告者の家に連れて行った。かくて妾を探し出すことができ、宣は放免された。

無実の罪で捕らえられたいとこを救うために、証人を捜し出すという話で、この話には怪異は登場せず、推理小説のような趣を持っているが、洛陽城の特徴がよく現れた話といえるだろう。

密告者の作り話の中ではあるが、洛水は死骸の捨て場所とされている。洛水が、この世の者ではなくなった死骸が落ち着くのに格好の場所だったということであろう。次に中橋は、人捜しの懸賞金を出す場所として登場する。人々の往来が多く、懸賞金をかけるのにふさわしい場所だったからであろう。最後に登場する天津橋は、官吏が皇城を出て帰途につくのに通る橋という役割を果たしているし、そこで罵倒したのは、小説に書かれているように、皇城内の御史台から十分に遠いというばかりでなく、往来の多いところであるから、多くの人々の前で罵るという効果もあったのであろう。さらに、士大夫が公衆の面前で人を罵るという非日常的な場面が展開されるのは、そこが境界であるということとも関わっているかもしれない。

以上のように、それぞれの場所の特性がよく活かされており、まさしく舞台が洛陽

の町でなくては生まれえない話といえるのではないだろうか。

### おわりに

以上、本稿では、隋唐洛陽城が持つ基本的な構成上の特色である、洛水が町を分断しているという点が、小説に及ぼした影響について考えてみた。

水辺ということであれば、先にも触れたように、唐長安城にも城北に渭水があつて渭橋がかかり、また城内の唐南隅には曲江池があつた。渭水については、例えば、蘇州で知り合った竜の化身の友人に手紙を預かった主人公が、いわれるままに渭橋に赴き目を閉じて橋柱を叩くことによって水中の世界に招き入れられる話（『太平廣記』巻421「劉貫詞」、出『續玄怪録』）があり、曲江については、例えば、白將軍という人物が曲江で馬を洗っていると足に白い帯のようなものが巻き付いて馬が暴れ出し、ほどいてみると血が数升流れたという話（『太平廣記』巻424「白將軍」、出『西陽雜俎』）がある。これらの話からも明らかなように、渭水や曲江などの場所もやはり異界性を持っていた。しかし、先にも述べたように、渭水は城外にあり、曲江は城内とはいえ東南隅にあつて、行楽の時などに訪れる特別な場所であつた。毎日通りかかるような日常的な場所ではなかつたであろう。実際、渭水や渭橋を舞台にした小説は、洛陽の登場する話よりも長安の登場する話の方が遥かに多いであろうことを考えれば、さほど多くないようであるし、曲江を舞台とした小説は、行楽地として描かれることがほとんどのようである<sup>(25)</sup>。

また、唐長安城でも、漕渠・永安渠などの水路が城内を流れ、そこには橋も架かつていた。これらの場所は日常的に人々が渡っていたであろうが、そのような水路は、もちろん隋唐洛陽城にもあり<sup>(26)</sup>、どの時代のどの都も同様であつたと思われる。そして、こういった水路が小説の中で重要な位置を占める例はほとんど見当たらない。

長安城のこのような状況と比較してみると、隋唐洛陽城の特異性がよく分かる。大きな洛水が町を分断し、500メートルともいわれる大きな橋が架かっている隋唐洛陽城は、都市の中心部に異界・境界を持つという、ほかの都市にない条件を備えていたといえるだろう。そしてそのことによって、隋唐洛陽城は、非常に豊かな小説世界を作り出したといえるのである。

以上、隋唐洛陽城について、洛水とそこに架かる橋が持つ異界性・境界性が小説に大きな意味を持っていたであろうことについて述べた。門外漢ゆえの誤りや調査不足が多々あることと思う。諸賢のご批正を乞う次第である。

注

- (1) 金文京『中国小説選』所収。『鑑賞中国の古典』第23巻、角川書店、1989年。以下、注においては原則として敬称を省略させていただく。
- (2) 『古代小説与城市文化研究』（復旦大学出版社、2005年）。第1章「唐代小説中的城市文化」の第3節「唐代小説中的其他城市」があり、長安以外の都市の一つとして、「神異之都：唐代小説中的洛陽」なお、葛氏は長安以外の都市として、洛陽のほかにもう一つ揚州を挙げている。
- (3) 以下、洛陽城の位置等の詳細に関しては、主に下記の文献を参考にした。
- ・清・徐松『唐兩京城坊考』
  - ・平岡武夫・今井清編『唐代の長安と洛陽（索引篇・資料篇・地図篇）』（唐代研究のしおり5～7、京都大学人文科学研究所、1956年、のち同朋舎出版、1977年）
  - ・葉曉軍『中国都城歴史図録』第二集（蘭州大学出版社、1986年）
  - ・松浦友久・植木久行『長安・洛陽物語—悠久たり王城の地』（『中国の都城』第2巻、集英社、1987年）
  - ・愛宕元『唐兩京城坊攷 長安と洛陽』（平凡社東洋文庫、1994年）
  - ・楊鴻年『隋唐兩京城坊里譜』（上海古籍出版社、1999年）
  - ・李健超『増訂唐兩京城坊考』（三秦出版社、2006年）
- (4) 秦の咸陽城は渭水をまたいで南北に拡張されたというが（注3前掲松浦・植木氏書229頁参照）、小説が書かれるようになる遥か前の都である。
- (5) 隋唐洛陽城において、南側が官僚の居住地になっていたことについては、妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」（『東洋文化研究所紀要』第133冊、1997年）に詳しい。
- (6) 中唐以降、洛陽が「退老の地」になったこと、注3前掲植木氏の書に詳しい。
- (7) 以下、小説の引用には通し番号を施し、番号によって称することとする。また、煩瑣になるので、小説の引用はあらすじのみとし、あらすじも関係のない部分については省略する。ただし、洛陽に関する重要な部分については、一部原文を（ ）内に引用する。テキストは中華書局本『太平廣記』を用い、『太平廣記』に記される出典を「出『〇〇』」の形で記す。他のテキストを用いて校勘等を行った場合は、その都度記すこととする。
- (8) 当時の孟郊の状況や新居を構えた際に作られた連作詩については、齋藤茂「孟郊『立德新居十首』について」（『集刊東洋学』、1997年）および『孟郊研究』（汲古書院、2008年）に詳しい。
- (9) 詩題の後の四桁の作品番号は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、1960年）により、白居易詩の制作年代については、同書および朱金城『白居易集箋校』

（上海古籍出版社、1988年）による。また、白居易の友人宅の配置等の詳細については、妹尾達彦「白居易と長安・洛陽」（『白居易研究講座第1巻 白居易の文学と人生 I』）所収。勉誠社、1993年）がある。

- (10) 中国文学における川の異界性・境界性について論じたものとしては、安藤信廣「中国文学と異界」（『新しい漢文教育』第21号、1995年）があり、また、拙論「堤の美女—六朝小説における愛情表現初探—」（『中国学研究論集』第6号、2000年）でも触れた。
- (11) 『十道記』は唐代の書物のようであるが、永嘉の乱を背景とした話なので、原型は六朝期にできていた可能性があると考え、ここで挙げることとした。
- (12) 橋の持つ境界性に関しては、吉田隆英『月と橋—中国の社会と民俗』（平凡社、1995年）および相田洋『橋と異人』（研文出版、2009年）に詳しい。
- (13) 注3前掲松浦氏・植木氏共著および植木氏著書。なお、架け替えられた後でも、黄道橋と天津橋の二橋が連続しているのだが、黄道橋の名称の方は小説等の中で用いられることはほとんどなく、人々は両者を併せて天津橋という名で呼んでいたように思われる。
- (14) 注12前掲相田氏著書217～218頁。
- (15) 市が持つ境界性については、注10前掲安藤氏論文に触れられているほか、相田洋『異人と市—境界の中国古代史—』（研文出版、1997年）に詳しい。また相田氏は、橋が市と似た性格を持つことについても、注12前掲書で論じられている。
- (16) 乞食の異人性については、黄強『中国の祭祀儀礼と信仰』（第一書房、1998年）や岡本不二明「唐代傳奇「李娃傳」の読み方」（『未名』第18号、2000年。後、『唐宋の社会と小説』）所収。汲古書院、2003年）等に詳しい。
- (17) 注3前掲愛宕氏著書243頁。
- (18) 注12前掲相田氏著書218頁。
- (19) 注3前掲『唐兩京城坊考』巻5 雒渠の条。
- (20) 注12前掲吉田氏著書163頁。
- (21) ただし、注3前掲李建超氏著書が雒渠の条に引く『唐會要』巻86によれば、洛陽の商人李秀貞が5年の歳月をかけて「南市北之洛河」に架けた「石橋」が天宝8載（749）に完成したという。架けられた位置からすると浮橋のようだが、「石橋」と表現しており、実際は浮き橋ではなかったのかもしれない。とはいえ、ほかの二橋と比べるとあまり歴史書等にも登場しないようであり、やはり天津橋や中橋ほど繁華な場所ではなかったと思われる。
- (22) 『太平廣記』ではこのように「又」と記していて、前の話「徐智通」（出『集異記』）

の類話ではあるが、徐智通は関係がないようであるから、そのまま「又」と記しておいた。

(23) 宿屋というものの自体も境界性をもつ存在であることについては、注12前掲相田氏著書に詳しい。

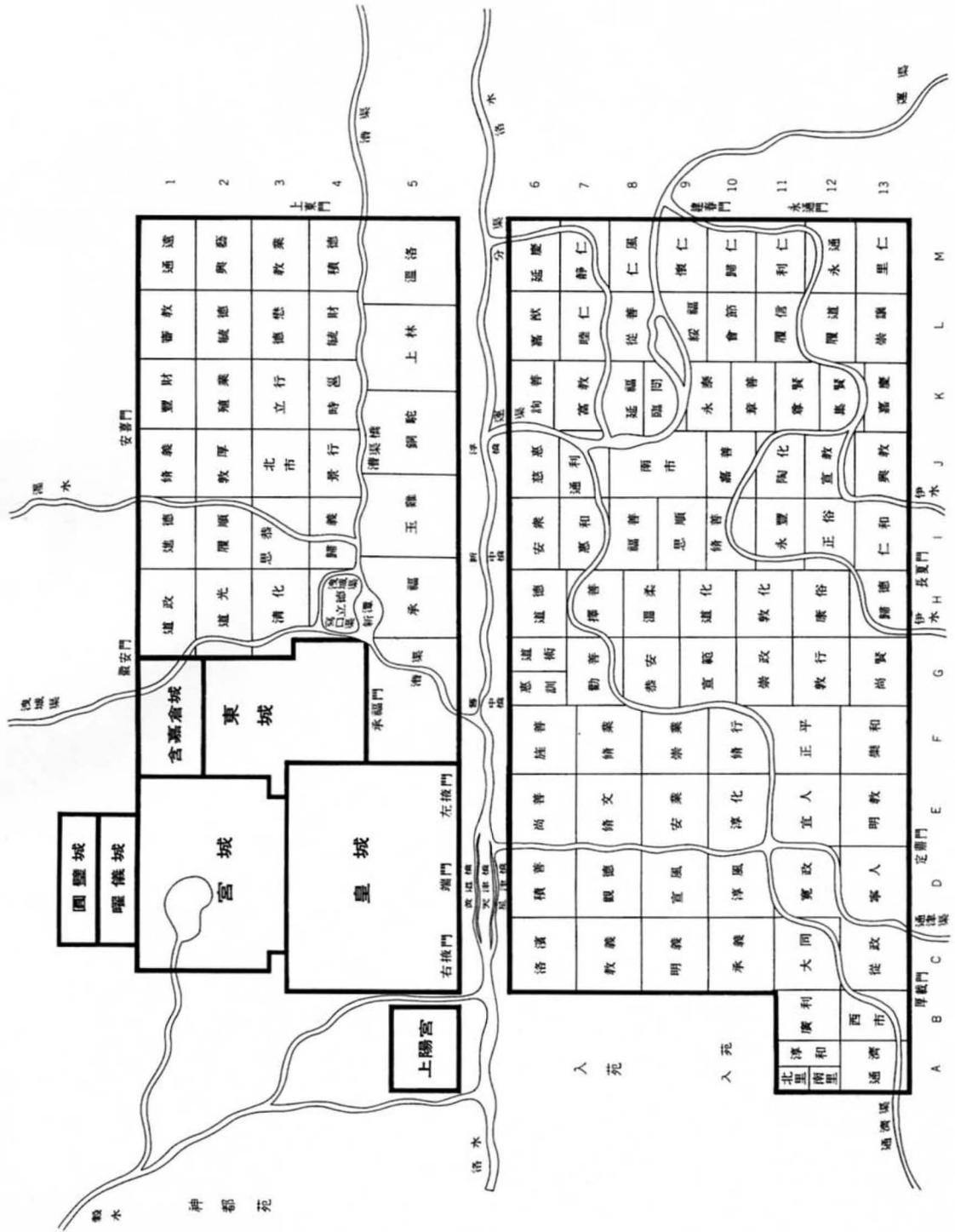
(24) 浮橋がその名の通り浮き橋であったとしたら、橋の下で人が泣くということはありえまい。ただし、浮き橋でなかった可能性もあることについては、注21参照。

(25) 例えば、「杜子春傳」(『太平廣記』巻16、出『玄怪續錄』)で、不思議な老人と出会うのが「東市西門」であることや、市場で異類の女性と知り合う話がしばしば見られること(『太平廣記』巻331「薛矜」、出『廣異記』・『太平廣記』巻458「李黃」、出『博異志』)などが端的に表しているように、長安における異界の中心は、市場だったようである。

(26) 隋唐洛陽城内の水路については、宇都宮美生氏「隋唐洛陽城における河川、運河と水環境」(『中国水利史研究』第37号、2008年)および「隋唐洛陽城時期西苑的四至和水系」(『洛陽博物館建館50周年論文集』所収、大象出版社、2008年)に詳しい。

(附記)

本稿は、平成20年度文学部プロジェクト研究「六朝・唐代の知識人と洛陽文化」による研究成果の一部である。同プロジェクトのメンバーである下定雅弘氏および佐川英治氏とともに洛陽を調査に訪れた時の体験が、本稿の出発点となっている。調査旅行の時に色々とお世話になった両氏と、現地で周到な準備と案内をして下さった塩沢裕仁氏・宇都宮美生氏、そして洛陽で知り合った多くの方々に、衷心より感謝を申し上げたい。



第四〇圖 洛陽城圖 (一)

付図：隋唐洛陽城（平岡武夫・今井清〔編〕『唐代の長安と洛陽 地図篇』京都大学人文科学研究所、1956年。のち、同朋舎出版、1977年による）